



👁️👁️ みどころ

新型コロナウイルスと日夜闘う医師は大変だが、戦場カメラマンはそれ以上に命を張った過酷な商売。しかして、シリアの反政府勢力の一員として学生運動に参加したワアドは、なぜ市民ジャーナリストの道？樺美智子は60年安保闘争で死亡したが、ワアドは大丈夫？

中東問題は複雑かつ怪奇。アサド政権と政府軍、それと結託してアレッポの町を爆撃するロシア軍が悪で、反アサド＝自由シリア軍が善。ワアドのそんな見方はあまりに一面的だが、本作はワアドのカメラによるドキュメンタリー映画だから、それでもOK!?

シリア内戦やIS(イスラム国)の横暴、さらにはトランプ大統領誕生につきまとうロシア疑惑等に何の関心も示さない、今ドキの平和ボケ日本人は必見!

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■シリア内戦とは？平和ボケの日本人は？それが大問題！■□■

本作は第72回カンヌ国際映画祭で最優秀ドキュメンタリー賞を受賞し、第92回アカデミー賞の長編ドキュメンタリー賞にもノミネートされた作品。しかし、その舞台が中東の国シリアと聞き、さらにカメラのターゲットが「シリア内戦」と聞くと、平和ボケした今ドキの日本人はほとんど関心を示さないのでは？とりわけ、新型コロナウイルス騒動の真っ只中にある今の日本では、3月29日深夜に志村けんが死亡したというニュースには世代を超えた国民の関心が集まっても、2009年に起きた「アラブの春」にも、IS(イスラム国)の勢力拡大と衰退にも何の関心も示さないのが、今の日本人だ。したがって、本作のような映画が日本で大ヒットするのは難しい。

監督がアメリカのマイケル・ムーアと聞けば「ああ、あのドキュメンタリー映画の問題

作ばかり作っている監督か」と反応しても、それがド素人のワド・アルカティーフ監督だと聞くと、なおさらだ。したがって、チラシにうたわれている「母は銃のかわりに、カメラを手にとった。世界に伝えるため、そして戦火の中で生まれた小さな命のために——。」の言葉がどこまで日本人の心に響くかは大いに疑問だ。現実には、新型コロナウイルス騒動のせいもあって、劇場はガラガラ……。

■□■昔は英国、今は米国の二枚舌！中東情勢は複雑怪奇！■□■

デヴィッド・リーン監督の『アラビアのロレンス』(62年)は名作中の名作だが、ここではロレンスの軍人としての獅子奮迅の活躍はわかっても、陸軍将校の一人に過ぎない彼が中東支配を狙う英国の政府や上層部からいかに便利屋的に利用されていたのか、については容易に理解することができなかった。また、当時の英国がいかに「二枚舌外交」を展開していたのかを理解するのも難しかった。第2次世界大戦終了後の中東情勢では、米国の後押しによる1948年のイスラエルの建国が最大の歴史的出来事だが、それによって1948年～1973年にかけて中東戦争が勃発。そして、米国の二枚舌外交(?)のために中東問題はさらに複雑になったうえ、東に広がり、アフガニスタンやイラクを含めた政治・軍事問題になっていった。他方で、ソ連が崩壊し、アメリカの一国支配が強まる世界情勢下、2001年の9.11同時多発テロ事件の後は、「対テロ戦争」の名目でアメリカが始めたアフガニスタン紛争(2001年)とイラク戦争(2003年)が勃発した。

そんな動きの中、2011年3月のアラブの春が訪れ、これによって常に戦雲が立ちこめていた中東にも一気に春が訪れるかと思えたが、そんな楽観的な予想は見事に外れてしまった。これ以上、中東情勢や、その1つの局面としての「シリア内戦」についての私の見解は書かないが、本作を鑑賞するについては、本作のパンフレットにある、①綿井健陽氏(ジャーナリスト・映画監督)の「人間の叫びが誰かの心の『内』に響き、具体的なアクションが『外』で起こるために——」、②ナジブ・エルカシュ氏(ジャーナリスト)の「シリア革命への想い」、さらに、③年表「本作とアレppo、世界の状況」をしっかりと読んで、複雑奇様な中東情勢を勉強することが不可欠だ。

■□■樺美智子はデモで死亡！この女子学生の選択は？■□■

アレppo大学でマーケティングを学ぶ女子学生のワド・アルカティーフは、2012年の今、勉強もほどほどに民主化を求める学生デモに参加。本当はジャーナリストになりたかった彼女は、スマートフォンとカメラを携え、町の惨劇と破壊をカメラに収め始めることに。ちなみに、安保反対!の街頭デモが繰り広げられていた1960年の日本では、6月15日、東大の学生運動の闘士・樺美智子が全学連の国会突入騒動の中で死亡してしまっただが、ワドは大丈夫?両親は、子供の時から女の子のくせに気が強く頑固だったワドが学生運動にのめり込でいくことに心配していたが、卒業・就職を控えてワドはどんな人生の選択を?私はたまたま司法試験への道を選んだが、さてワドは?

私が1960年代後半に学生運動に没頭していた当時は、活動家同士の恋愛があちこち

に生まれ、その中には学生結婚をする人たちもいた。そんな目でワアドを見ていると、一足先に医学部を卒業し、今は医師としてアレppoの民主化闘争に参加しているハムザ・アルカティーブとの信頼関係がひときわ厚そうだから、ひょっとしてこの2人は結婚するの？そう思っていると、案の定……。学生の間に独学で撮影手法を学んだワアドは卒業後は就職せず、市民ジャーナリストへの道を選ぶとともに、既にアレppoの町を守るため反政府勢力の一員として重要な役割を担っていたハムザと結婚することに。

もっとも、この当時のワアドのカメラは、映画を作るために撮影していたのではなく、単に趣味（自己満足？）のため（？）だったから、そこにはアレppoにおけるデモ隊の闘いだけではなく、ワアドとハムザの結婚の様子を含む、私生活がバッチリ撮影されていた。その私生活の映像は、例えば『プライベート・ウォー』（18年）（『シネマ45』未掲載）で見たような、プロの戦場カメラマンのカメラではあり得ないものだが、『娘は戦場で生まれた』と題され、一人娘サマを全面に押し出した本作では、そんな私生活の強調もOK……？

■□■戦場カメラマンの役割は？ワアドの視点は？■□■

中東紛争やシリア内戦の最前線をフィルムに収めて市場に売る「戦場カメラマン」は日本にもたくさんいるが、それは死と隣り合わせの危険なお仕事だ。そのため、①2012年8月には、ジャーナリスト山本美香氏がアレppoで射殺され、②2015年1月30日には、ラッカ付近でジャーナリスト後藤健二氏が殺害され、③2018年10月25日には、シリアで拘束されていたジャーナリスト安田純平氏が帰国している。彼らは日本人ジャーナリストとして中東紛争やシリア内戦そしてアフガンやイラクの実態を可能な限り客観的に報道しようとしていたはずだが、本作のワアドはそうではない。また、フランス人女優ジュリエット・ビノシュが報道写真家（戦争写真家）レベッカ役を演じた『おやすみなさいを言いたくて』（13年）では、現場で大怪我を負ったレベッカは一度は「母親として生きる！」と決心して帰国したにもかかわらず、再度戦場に戻っていった（『シネマ35』220頁）が、その情熱の根源は一体ナニ？それと対比して、市民ジャーナリストに過ぎないワアドの情熱の根源はナニ？

女子学生の時に反政府勢力の一員として参加したデモを契機として市民ジャーナリストになったワアドは、その立場で撮影した大量の資料を、今回の『娘は戦場で生まれた』と題した映画にまとめたわけだから、自分の立場や撮影の視点は最初から明確。つまり、アサド政権と、それを支援してアレppoの町を爆撃しているロシアが悪。それに抵抗し、アレppoの町を守っている市民、反政府勢力が善、という立場がハッキリしている。

■□■あまりに一面的？その是非は？本作はそれでもOK？■□■

しかし、アメリカが1948年にイスラエルの建国を後押しし、第1次～第4次の中東戦争を含め以降もずっと米国がイスラエルを支援しているのは一体なぜ？また、アメリカがアフガン戦争、イラク戦争を起こしたのはなぜ？そして今、トランプ大統領はイランとの対決姿勢を示しているが、その前のオバマ大統領の中東政策・イラン政策はどうだった

の？何ゴトもキレイ事で済ませた感が強い平和主義者のオバマ大統領は、シリア問題についても平和的に物事を解決するべく、シリア反体制派への支援を最小限とし、本格的な軍事支援を行わなかった。ちなみに、もし予想通りに、2016年11月の大統領選挙でヒラリー・クリントンがトランプに勝利していたら、ヒラリーが展開しようとしていた中東政策とは？そして、トランプ政権の誕生について回って問題にされている「ロシア疑惑」とは一体ナニ？ヒラリー・クリントンはオバマ大統領とは正反対に、シリアのアサド政権に対して軍事力での対抗も選択肢の1つとして示していた。そのため、ロシアのプーチン大統領はヒラリーよりはトランプの方がマシ。それなら、トランプ大統領を誕生させるため大統領選挙にも介入を！そう考えたのではなかったの・・・？そのような論点を考えていくと、次第に何が善で、何が悪か、について単純に言えなくなってくるのは当然だ。

他方、中東では同じイスラム教でもシーア派とスンニ派の対立が顕著だから、イスラム原理主義集団がどんな行動をとるかが心配されていた。それが現実になったのがIS（イスラム国）の誕生だ。それをどう考えればいいのかは非常に難しいが、ISの横暴ぶりが注目されてくると、シリア政府軍以上にISの横暴ぶりが世界的な大問題になってくることに・・・。そんなこんな複雑怪奇な中東問題が浮かび上がってくると、必ずしもアサド政権＝シリア政府軍＝ロシア＝悪、市民＝反政府勢力＝自由シリア軍＝善という図式化は成り立たなくなってくる。

そのため、『キネマ旬報』3月下旬特別号「REVIEW 日本映画&外国映画」では、他の2人は星5つ、星4つを付けているものの、藤木TDC（フリーライター）だけは「監督はアサド政権とロシア軍を名指して非難する。だがロシア報道では市街地に数千人いたとされる武装した自由シリア軍兵士の姿は写さず、アメリカやトルコの軍事支援にまったく触れない。意図的に伏せているならフェアではない。」と書き、星3つとしている。私は本作のすばらしさは認めるものの、この指摘には全く同感！本作の視点があまりに一面的に過ぎるのは明らかだ。しかし、本作はあくまで市民ジャーナリストであるワアド・アルカテイーブ監督の演出によるドキュメンタリー映画だから、それでもなおOK・・・？

2020（令和2）年4月7日記